MEMORIAL ROOM

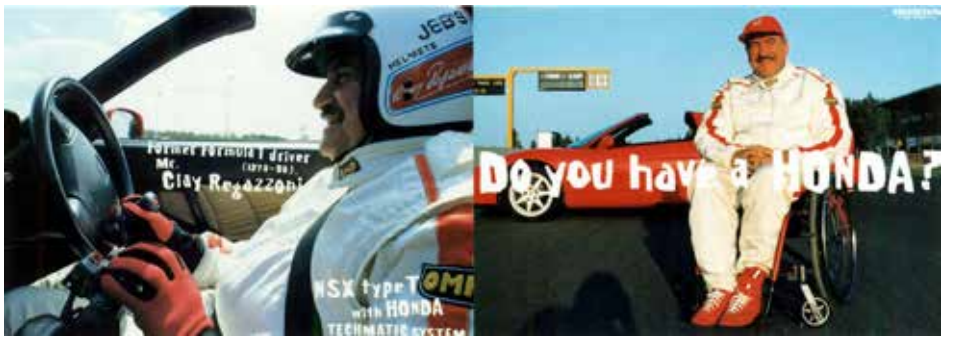
メモリアルルームの来館者を迎えてくれるクレイ・レガッツォーニの等身大パネルと、アレッシアさん（左）と娘のソフィアさん、そしてアレッシアさんのご主人、ルカ・ジョルジェッティさん。ちなみにメモリアルルームの様子は、公式サイト http://www.clayregazzoni.com/it/ でくわしくご覧いただける。（LM）

Clay Regazzoni,
un pomeriggio a toccare Rega-san.

クレイのおしえ　クレイ・レガッツォーニ　メモリアルルームを訪ねて

フェラーリ、BRM、そしてウィリアムズ――。数々のトップチームに栄光をもたらしながら、レース中のアクシデントにより、車いすでの暮らしを余儀なくされたF1ドライバー、クレイ・レガッツォーニ。しかし、持ち前のガッツとポジティブさは現役時代そのままで、その後もパリダカ(!)や幾多のヒストリックカー・レースに参戦。前進しつづけることの尊さを、世界中のファンに示し続けた。今回は、そんな彼のレースキャリアと生きざまに触れるべく、クレイさんの生まれ故郷、スイスのルガーノにある“クレイ・レガッツォーニ メモリアルルーム”を訪問。“レガさん”の素顔を、長女のアレッシアさんに語っていただいた。

早田禎久=文
report : Yoshihisa Hayata
ロレンツォ・マルチンノ、本田技研工業株式会社、
マイク・ヘイワード、クレイ・レガッツォーニ メモリアルルーム=写真
photo : Lorenzo Marcinnò,HONDA,Mike Hayward,MEMORIAL ROOM Clay Regazzoni
野口祐子=コーディネーション
coordination : Yuko Noguchi



クレイさんをイメージ・キャラクターに起用した“Do you have a HONDA?”「Free Mind編」のポスター。2000年に日本のテレビでたびたび放映されたおなじみのCMだ。(HONDA)

日曜日よりの使者

ミラノの高速環状線に乗り、アレーゼのアルファ・ロメオ博物館が見えてきたら、次のジャンクションを右へ。そのままA9でどんどん北上すると、突如、パノラマで飛び込んできたのはコモ湖の絶景。が、その美しさにウットリする間もあらばこそ、たちまちスイスに入国。ここまでわずか40分弱。さらに20分ほどクルマを走らせて今回の目的地、ルガーノに無事到着である。「クルマでスイスに入るには40ユーロかかるんだ」 我らがフォトグラファー、ロレンツォのそんなアドバイスを受け、途中のサービスエリアで“ビニェッタ”という小さなステッカーを購入する。一枚40ユーロ(約4800円)也は道路使用料の先払いで、これをウィンドシールドに貼った車両は、むこう一年、スイスを自由に出入りできる由。おかげでキアッソの税関もまったくのフリーパス。いささか順調すぎたか、クレイ・レガッツォーニ・メモリアルルームには約束の1時間前に着いてしまった。

「さぁ、どうぞ、中に入って!」

そんな取材班を笑顔で迎えてくれたのは、クレイ・レガッツォーニの長女で、メモリアルルームの案内役でもあるアレッシアさん。なるほど、目元がパパそっくりだ。ルガーノ湖を見下ろす小高い丘にあるメモリアルルームは、モダーンで美しい住居棟の半地下にある。その高潔なイメージは、アクティブな品格を湛えたクレイさんそのものだ。

「じゃあ、まずはこの映像から始めましょう」

と、目の前の大きなモニター・スクリーンに映し出されたのは、クレイさんがホンダNSXを走らせるシーン。2000年に日本でテレビ放映されたホンダの企業イメージCM、“Do you have a HONDA?”シリーズ。その「Free Mind編」のキャラクターに起用されたクレイさんの、あの映像である。甲本ヒロトがリードする ♪シャララ〜ラ、シャララ〜ラのスキャットでおなじみ、ザ・ハイロウズの「日曜日よりの使者」。これをバックに手動操作での運転を補助する“ホンダ・テックマチックシステム”を装備したNSXでチェコのブルノ・サーキットを豪快かつ楽しそうに駆け抜けるクレイさん。実に20年も前の作品だというのに、グイグイ背中を押されるような、この不思議な高揚感は一体なんだろう?

同じくDo you have a HONDA?のCMから。車いす姿のクレイさんと写るのはアレッシアさん、その人。(HONDA)

「撮影は3日間かけて行なわれました。1980年F1ロングビーチGPで遭遇した大クラッシュで下半身不随となり、以来、車いすでの生活を始めた父。が、挑戦心と冒険心にあふれる彼は、手動式ドライブシステムを活用し、健常者でもその過酷さに根を上げる“パリーダカール・ラリー”に、都合5回参戦しました。クルマの運転や競技は、障がいがあっても心の底から楽しむことができるんだ、とみずからそれを実践し、啓蒙することで新たなムーブメントを世に広げたい。そ

1974年のF1西ドイツGPでフェラーリ312B3を駆り優勝したクレイさん。1周22.835kmのニュルブルクリンク旧コースを14周するレースだった。「父がヒゲを生やし始めたのは73年ごろから。南米ラウンドにコンセントのアダプターを持っていくのを忘れ、電気シェーバーが使えなかったんですって。ところが、この無精ヒゲが意外にイケてて、ならばムスタッシュ(くちヒゲ)だけ伸ばそうか、となったようです」とアレッシアさん。(LM)

んな想いでいっぱいでした。そんな折、身体に障がいを持つ人々が便利で快適に運転するための補助装置、テックマチックシステムを開発したホンダが、そのアピールのためのキャラクターに父を選んでくださった。父はもちろん、私たち家族はこのCMに参加できたことをいまでも感謝し、誇りに思っています。父はこのバックに流れる曲が大好きで、鼻歌まじりによくハミングしていたんですよ(笑)」

ちなみにCMの最後に、車いす姿のクレイさんと一緒に登場するブロンドの女性が、何を隠そうアレッシアさん、その人である。その後、クレイさん親子は日本に招かれ、ツインリンクもてぎでは多くのファンと触れ合う機会があったという。

「写真や本、ミニチュアカーを手にしたたくさんの方からサインを求められ、父は本当にしあわせそうでした」

1980年F1ロングビーチGPでの事故遭遇後、車いす生活となったクレイさんが都合5回も挑戦したパリ-ダカール・ラリー。写真はIVECO110でカミオン・クラスに臨んだ1986年大会。(MRCR)

リミットは240km/h !?

そう笑顔で語るアレッシアさんだが、その昔、地元ルガーノで通っていた幼稚園や小学校で、F1ドライバーである父、クレイ・レガッツォーニの“まばゆさ”を感じたことはほとんどなかったと振り返る。

「謙虚で質素を旨とするスイスでは、人はすべからく平等です。両親がどんな職業に就いていようと子供は子供。特別扱いはいっさいありません。だから学校で、『キミのパパ、F1ドライバーなんだって?』とか、『優勝したんだって?』なんて言われたことは皆無。でも、私と弟のジャン-マリアにとってはそれが当たり前でした。ところが、ルガーノからクルマで20分の距離にあるキアッソの税関でイタリアに入国してビックリ。私たちのパスポートを見るなり、『エ〜!? Regazzoniって、あのレガッツォーニ? ちょっと、エ、こないだのモンツァで勝った、あのレガッツォーニさんのご家族? サインして、サインして!』って税関吏の皆さんが仕事そっちのけでキャーキャー言ってる。私と弟はそれだけでビックリ。ウチのパパがこんなに有名だなんて思いもよりませんでしたから」

「でも、なにかフツーの人ではないなって感覚は、子供心にも感じていました。なにしろ、一緒にいておもしろくて、とにかく楽しい。まだ私たち姉弟が小学生だった頃、父と母と4人でドライブしていたときのこと。道路脇にある“60”と書かれた標識を差して、父が弟に訊き

クレイさんが1970年のデビュー年から乗り継いだ歴代のF1マシーンたち。一番下から時計回りにフェラーリ312B（70年）、フェラーリ312T2（76年）、ウィリアムズFW07 DFV（79年）、フェラーリ312B3（74年）、BRM P160E（73年）、フェラーリ312T（75年）、シャドウDN9 DFV（78年）、フェラーリ312B2（72年）、エンサインN177 DFV（77年）、エンサインN180 DFV（80年）。（MRCR/LM）

ました。なぁジャン-マリア、あの数字、なんだと思う？ そうそう、スピード制限な。でも、アレは乗員ひとりにつき60km/h出してイイですよ、って意味なんだ。いまこのクルマには4人乗ってるから、ボクらは60×4＝240km/h出してイイんだよ、って（笑）。ところが、話はここで終わらなくて、この話を真に受けた弟が学校の交通安全教室でコレをしゃべっちゃった。“60”の標識がある道路では、家族4人が乗っているクルマは240km/hまで出していいんだよ、って。『ジャン-マリア、そんなワケないでしょ！ そんなこと誰が言ったの？』と、顔を真っ赤にして尋ねる先生に弟は、パパがそう言いましたって……もう、教室はパニック状態（笑）。でも、そういうことをクチにしてもアハハで済んでしまうのが、父の父たるゆえんでね。娘が言うのもナンですけど、とってもチャーミングで憎めない男性でした」

「でも、家庭ではもの静かな普通の男性でね。チャンピオンだとかウィナーなんて形容はおよそそぐわない、とにかく謙虚な人。いたって地に足のついた暮らしぶりです。もっともファンの皆さんは、そんな父の日々の暮らしからにじみ出る独特の気配に惹かれたのかもしれませんね」

「地元のバールで他のお客さんとカードゲームに興じたかと思えば、モナコのガラ・パーティーではレーニエ大公やグレース王妃とテーブルを囲んだり。ホントにいろんな方と接していました。そして、スイスという国の教育の賜物でしょうか、レースでどんなによい結果が出ても、あるいはその逆でも、上がることも下がることもなく、父は淡々としていました」

怒り続ける理由

1980年3月30日、F1ロングビーチGPで、そんなクレイさんが大事故に遭遇した。アレッシアさんは当時、まだ13歳にすぎなかった。

メモリアルルームの全景。手前からクレイさん所有のフェラーリ365GTB/4デイトナ、1974年西ドイツGPウイナーのフェラーリ312B3、そして70年欧州F2選手権でドライブしたテクノTF70コスワースFVA。今回はメインテナンスのため“欠席”となったが、通常はここに90年型のフェラーリF40が加わる。（LM）

MEMORIAL ROOM Clay Regazzoni,
un pomeriggio a toccare Rega-san.

いまやグランプリ通算114勝を誇る名門、ウィリアムズにF1初勝利をもたらしたのもクレイさんだ。写真はその記念すべきレースとなった1979年イギリスGPでのカット。クレイさんがコクピットに収まったFW07を微笑みながら見つめるのは、クレイさん担当の日本人メカニック、中矢龍二さん。ちなみに1939（昭和14）年9月5日生まれのクレイさんは、このとき40歳。F1で通算5勝を挙げた大ベテランにとって、このウィリアムズでの優勝が最後のグランプリ・ウインとなった。（MH）

「ウレンチい信

都さ「なあ分はにて「は当憐あ「ひパにはは「ずもそこ

19
左
ア

「でも、そういう父でしたから1980年のF1ロングビーチGP（USウェスト）でレース中事故に遭ったときもいつも通り。マシーンのブレーキペダルが折れ、減速できないままタイヤバリアに覆われたコンクリートウォールに直撃するアクシデントでしたが、所属していたチーム・エンサインに恨み言ひとつ言うでもない。下を向くどころかいつも笑顔。そして、いつかふたたび、自分の足で歩ける日の訪れを信じて、積極的に手術とリハビリに向かう道を邁進しました」

クレイさんの努力とアレッシアさんたちご家族の献身的な協力は都合5年におよんだが、結果的に自立歩行はかなわず、以来、クレイさんは車いすと共に歩むことになった。

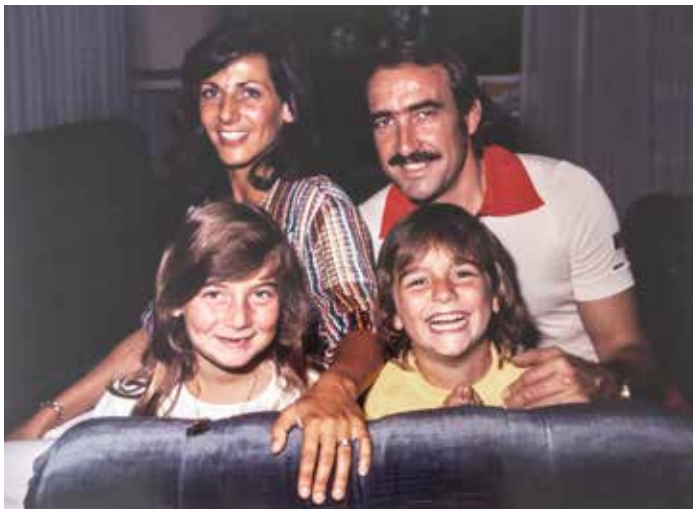
「父は、『なぜ、自分がこんな目にあわなきゃいけないのか?』ではなく、『なぜ、自分はこの事故にあったのか?』と考える人でした。であるならば、F1ドライバーとして多少なりとも名が知られている自分が行動することで、なにかを発信することができる。そう考えて父は前進し続けました。彼が事故にあう前に送っていた生活を、事故にあった後もずっと続けていく。自分が望むままの人生、毎日を送って行こうと考えたんです」

「しかし1980年といえば、いまから40年も昔のことです。スイスをはじめとする欧州では、車いす生活者はウチに閉じこもる暮らしが当たり前。街もバリアフリーの対応はなく、人々は車いす生活者を憐れむ一方で、彼らが外に出てくることを許さない、そんな空気があったように記憶しています」

「父はいつも、『車いす生活者は、日常生活のたいていのことを自分ひとりでこなすことができる』と言い、実際、身のまわりのことをテキパキこなしていました。ところが世間には、それはムリ、と頭ごなしに決めつける風潮が蔓延していた。それを少しでも解消すべく、父は果敢に挑んでいきました」

「1980年当時、車いす生活者は自動車の運転が禁じられていたはずで、その緩和にむけ関係各所に働きかけたかと思えば、健常者でも過酷きわまりないパリ-ダカール・ラリーに都合5回出場したり。そこで見事完走し、父と同じ状況にある皆さんに『ボクたちはこんなことができるんだ!』と発信することが、パリ-ダカ参戦の大きな目的だったのだと思います」

イタリアのテレビ局、RAIのバラエティ番組“カンツォニッシモ”に出演し、司会のラファエッラ・カッラと見事な“ラ・クンパルシータ”を披露するクレイさん。曲のエンディング直前でカッラ女史を放り出し、クレイさんひとりがポーズを決め、すべてもっていくというオチがバカウケで、それまで男性ばかりだったF1ファンにあらたに女性層が加わるきっかけとなった。（MRCR/LM）



1974〜75年ごろに撮影されたとおぼしきレガッツォーニー家の家族写真。むかって後列左よりマリア-ピア夫人、クレイさん、前列左からアレッシアさん、そして弟のジャン-マリアさん。いにしえの“スター千一夜”をおもわせるとても美しいカット。（MRCR/LM）

「とにかく、意志のカタマリっていうくらい気持ちの強い人でね。あと、不条理に対しても怒っていました。世の中の人たちは、車いす生活者について知らなさすぎる。でも、ボクたちが自力でキチンとできるということは、彼らに伝えないといけない、とね。悪気はないのでしょうが、当時は礼を欠いた物言いや問いかけを車いす生活者にする方が少なくなかった。日々、そんな目にあっていると、いい加減、外に出るのがイヤになって部屋に閉じこもってしまうものですが、父はけっしてメゲません。人々の誤解や無知に出会うたび、ひとつひとつ正面から向き合い、それを解いていく。だからボクは一日100回くらい怒ってる、と（笑）。実際、父は単身で問題なく旅することができたのですが、空港のチェックイン・カウンターではかならず、付き添いの方はどなたですか？　と訊かれる。でも、それが車いすに対する社会のメンタリティーであり、常識なんだと。だからこそアタマにきたり、問題だと思う場面に遭遇したら、相手が納得してくれるまで向き合う。それがなくなるまで、ボクは怒り続けるよ、って（笑）」

「レストランなんかでは注文の際、直接、車いす姿の父に聞くのでなく、同席者に、『こちらの方は何を召し上がりたいのでしょう?』と聞いてくるケースもあるとか。でも、それが現実なんだから、そのひとつずつを変えていかなきゃダメなんだ、とよく言っていました」

3つの柱

そんなクレイさんが掲げ、実現に向け邁進した夢には3つの柱があった。アレッシアさんはこう続ける。

「半身不随の方が、いつの日か自分の足で立って歩けるようになる。

MEMORIAL ROOM Clay Regazzoni,
un pomeriggio a toccare Rega-san.

父であるクレイ・レガッツォーニの生きざまを語ってくれた長女のアレッシアさん。かたわらのフェラーリ312B3は、スイスのとあるコレクター氏から「私のガレージにあるより、ココにあった方が皆さんに見ていただける」と長期貸与されている由。「父の本名はジャン-クラウディオ。でも母は“クリーデ”って呼んでいました。それがいつのまにかClayになったんですけど、地元のルガーノでは“クライ”っていう発音になるはずで、おそらくはF1の英語圏の人たちが“クレイ”と呼びだしたんだと思います」（LM）

そのプロセスを経済的に支えたい。そのための財団、International Foundation for Research in Paraplegia（IRP／対麻痺研究のための国際財団）を1995年、スイスのジュネーブに発足。今年、25周年目を迎えました」

「そしてもうひとつは青少年への啓蒙活動。ここまでお話しした通り、残念ながら、大人のメンタリティを変えるのはかなり難しい。ならば、次代を担う子供たちに半身不随に関する真実を伝えたい。そこで、このメモリアルルームがオープンした2010年から、IRPと父の想いに賛同するメンバーで構成される“クラブ・クレイ・レガッォーニ”の協力を得て、小学生から高校生を対象とした授業を実施しています」

「彼らはここに来て、まず飾ってあるクルマに感動します。そして、そのプログラムには、かならず車いす生活者が参加し、実際の暮らしぶりを自分の言葉で語ってくれる。すばらしいことに、子供たちはあらゆる事柄に興味を持ち、新鮮な驚きとともにさまざまな質問を投げかけ、いろいろなことを知りたがります。ここにいる2時間のあいだ、ずっと質問が途切れないことがあるほどです。日常生活のほとんどはもちろん、スポーツだってなんだってできるんだよ、と車いすのチューターが語れば、彼らは目を丸くして話に聞き入ってくれる。その姿は、父にとって大きな希望であり何よりの支えでした」

「車いす生活を余儀なくされている方のうち、多いのが交通事故で半身不随になるケース。それも18歳で運転免許をとり、クルマに慣れスピードを追い求めて速いクルマに買い替えた24〜25歳の方が、

1965年、スイスのアニョという街で開催されたジムカーナ。クレイさんが駆るのはなんとハードトップ付きのホンダS600。「この頃、父は革を扱う技術を学んでいました。彼の実家は自動車修理工場で、クルマの内装やシートの修復をするための教育を受けていたんです」とはアレッシアさん。（MRCR/LM）

ハンドドライブ機構を装着した専用車を備えた、世界初のドライビングスクールは1988年、ヴァッレルンガで開講。2代目ニッサン・パルサーのボディ／シャシーに、アルファスッドの1.3ℓフラット4を搭載したARNA1.3tiがスクールカーだった。（MRCR/LM）

事故に遭うケースが多いんです。もし、クルマで速く走りたかったら、公道じゃなくてサーキットに行きましょう、とそう正すのが父なので、とても説得力があります」

「そして意外と多いのが、助手席に同乗した人が事故に遭遇し、半身不随になるケースです。だから飲酒した人や走り方が荒い人の横に乗ってはいけません、と生徒の皆さんに語りかけます。すべてをオープンに、時に生々しく、隠すことなく、真実を話します。父はこのプログラムに参加するとき、かならず白か黒かをハッキリさせ、けっしていい加減な物言いはしませんでした。時には、高校生と口論のようになったりすることもありましたが、父の語る“真実”に触れ、最後は互いに笑顔で握手を交わしたものです」

「そして、最後の柱がハンドドライブ機能の開発と普及促進です。自動車補助装置メーカーとして知られるグイドシンプレックス社をはじめとする、多くの企業が父の主旨に共鳴し、自動車メーカーの垣根を超えた活躍のフィールドを用意してくれました。実際、車いす生活者のなかにはクルマ好きな方が多く、父はそんな彼らとドライブやサーキット走行をともに楽しめる場を渇望していました。そんな父の願いはやがて実を結び、1988年にはハンドドライブ機能をもったスクールカーを備えたドライビング・スクールをローマ近郊のサーキット、ヴァッレルンガで開講。車いすで生活する人々に、大いなる可能性の扉を開くことができたのです」

突然の別れ

18歳でモータースポーツの虜となり、24歳でレースデビュー。31歳でF1に辿りつき、それから10年にわたりトップドライバーとして君臨し続けたクレイさん。1980年には事故のためF1引退を余儀なくされたが、その後は半身不随というハンディキャップの啓蒙と、ハンディキャップを負った人々が、誰でも思う存分クルマを楽しむことができるための道を切り開くことに力を注いだ、不世出のスイス人ドライバーはいまなお多くのファンに愛されている。

「ロングビーチで事故にあった直後、ロサンゼルスの病院に収容された父は、打撲のせいで目のまわりが真っ黒になっていたそうです。ところがスイスから駆けつけた母を見るなり、父は『キミが来るって聞いたから、こうやってキチンとメイクして待っていたんだ』、って(笑)。とにかく、どんなに苦しいときでもユーモアを忘れない人でした。その後、車いすの生活になってからも、弱音や文句を言ってる姿は一度たりとも見たことがありません」

「彼の日常には“問題”というものがありませんでした。すべては乗り越えるべき人生の課題にすぎない、と。レーシングドライバーを引退したあとも、さまざまな目標を立ててはそれに邁進していましたから、ヒトの3倍くらい濃い人生だったと思います。90歳でようやく年金生活に入るって感じかしら(笑)」

そういって笑うアレッシアさん。だが、クレイさんは、サヨナラも告げず、文字通り、突然この世を去った。2006年12月15日、イタリアの高速道路、A1のパルマ出口付近で走行車線を走行中、クレイさんが運転するクルマは約80km/hで前走車の貨物車に追突。67歳の彼はそのまま帰らぬ人となった。

「事故の理由はいまだにわかっていません。心筋梗塞を起こしたとの報道もありましたが、検死の結果、その可能性はゼロとのこと。その日、父はブレシアにいて、午後2時ごろにコーヒーを一杯飲んで、次の目的地のパルマに向かったそうです。ETCの通過履歴を調べたら、アッという間にパルマ近郊に到着していたとか。だから、健康面ではまったく問題はなかったんですよね(笑)。でも、ケータイで話していたわけでも、何か探しものをしていたわけでもないのに、トラックにぶつかって、スピンをしてガードレールに衝突。昔、300km/hでレースをしていた人が、80km/hでトラックにぶつかって亡くなるなんて信じられないでしょう? でも、これが運命というものなのかしら、と母や弟と話しました」

「生前、父は『みんな、ひとそれぞれに運命というものがある。だから、生きている限りは、恐れることなく好きなことをすべきだ』と話していました。生きなさい、生きなくちゃダメだ、ってね。自分がいつ死ぬかなんて、誰にもわからないんだから、とにかくしたいこと、自分がこれと思うことをやりなさい、と」

「それに父はF1でのアクシデント後に5年以上も苦労したでしょ? だから苦痛というものがどういうものかをよく知っていました。だから最期の瞬間くらいはそれがないといいなぁ、とも。自立心も旺盛でしたから、誰かの手を煩わすことにも抵抗があったでしょうし」

疲れを知らない男——。アレッシアさんは、父・クレイをそう形容する。こよなく愛するモーターレーシング、そしてクルマの世界でその能力を100%フルに出し切ったクレイ・レガッツォーニ。ルガーノのメモリアルルームでは、そんな彼の息吹にそこここで触れることができる。まるで我が家に帰ったかのような安心感となつかしさは、現役当時からの大ファンはもちろん、オンタイムでクレイ・レガッツォーニを知らないあなたにも、きっと感じていただけるはずだ。

クレイ・レガッツォーニ メモリアルルーム

訪問希望の方はEメール、電話、もしくはファックスにて、希望の訪問日時とあなたの連絡先を明示の上、事前予約をお願いします。
当日はアレッシアさんがアテンド、クレイさんのお話を聞かせてくださいます。

MEMORIAL ROOM Clay Regazzoni
Via Arbostra 34
6963 Lugano - Pregassona
Svizzera - Switzerland
E mail info@clayregazzoni.com
Tel. +41 91 972 68 33
Fax. +41 91 972 68 52
入館料:10ユーロ(ただし、現金のみ)

メモリアルルーム 直送プレゼント

アレッシアさんご提供のメモリアルルーム限定グッズ、①キャップ、②キーホルダーをそれぞれ2名ずつにプレゼント。ご希望の商品名、郵便番号、住所、氏名、年齢、CGに対するご意見を明記の上、ハガキかEメールでご応募ください。〆切は7月1日(水)、当日消印有効。

［宛先］
〒153-0063 東京都目黒区
目黒1-6-17 Daiwa目黒スクエア10F
株式会社 カーグラフィック
2007 レガッツォーニ係
［Eメール 宛先］
cg@cargraphic.co.jp